南都で発行された「嘉永の大地震」の被害を伝える瓦版には、和州郡山の状況が次ぎのように残されています。
「（嘉永７年の）６月１４日夜９ツ時（午前０時）より揺り始め、８ツ時（午前２時）大地震　　柳町１丁目より同４丁目まで、家屋およそ３８軒倒れ、……　　市中凡そ３分通り家崩れ、その他南都同様、死人凡そ１２０～１３０人」
他の記録では、南都で３５０人、全体で千人近い死者が出たと伝えられています。柳町の菊屋の建物が倒壊したのもこの時です。
薬園神社の境内の２基の石灯籠は、地震から４年後に危難を遁れることが出来た人々が建立したもので、うち１基の碑文は簡潔に地震のことを記録しています。
菊屋の建物が建て替えられるのは地震の翌年の安政２年、薬園神社に石灯籠が建てられた頃は、倒壊した家屋のほとんどが復興され、郡山の城下町は地震以前の賑わいを取戻していたのでしょう。
とすれば、この石灯籠は風化し始めた地震の記憶を、後世に残すための「語り部」なのです。
（嘉永の大地震　郡山　薬園八幡神社　２００２）